

政治研究結果報告書

—政治研究助成—

西暦2023年（令和5年）2月15日

一般財団法人 櫻田會
理事長 増田 勝彦 殿

研究者 早稲田大学政治経済学術院教授

多湖 淳

第40回（令和3年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。

※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入） Research Theme

イズムをめぐる実験研究

Experimental study on Isms in International Relations

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250 words 以内） Abstract (Purpose, Process, Significance)

In International Relations (IR), the famous isms such as Realism and Liberalism still prevail. As the debate over those isms began to abate in the 1990s, some textbooks departed from teaching them, but as an information short-cut, the isms seem to have an impact on how people understand international relations. Those isms could affect the people to support a particular type of foreign policies. Our experiment, by using two kinds of framing on Realism and Liberalism respectively, uncovers how the isms can change the general public's perception over key international policies. The evidence shows that the people support unilateralism in national security motivated economic sanction cases if they are primed for Realism and see the policy would increase a country's international status. By contrast, the study shows that the people are not really affected by Liberalism framing and being neutral for multilateral policy choices. The study is an example of showing the power of Realism and helps our understanding over how the people formulate their distinctive worldviews on international relations.

※研究の目的・研究方法・意義（和文 600 字以内）

国際関係論における、いわゆる「イズム」は、科学的な政治学分析の対象になりうるのかを問うのが本研究の目的である。実験を通じ、社会支配傾向 (Social dominance orientation) と楽観性傾向がリアリズムとリベラリズムの二つのイズムを決定すると論じる。いわゆるリアリズムは国家の間に大国と小国の違いを見据え、社会の階層性を常に見出す。他方、いわゆるリベラリズムは囚人のジレンマゲームでも無限繰り返しを考え、将来の影を認めて国際協力の可能性を認める楽観性を有する。よって、心理指標として社会的な支配傾向と楽観性傾向を計測し、それがいわゆる典型的な国際関係論のリアリズムとリベラリズムを説明する幅を見極める。日本国内において実験を行い、知見を国際学術誌にまとめて刊行する。イズムは宗教論争に陥り、「終わった」といった評価も北米ではあるが、それは科学できることを示すことはアメリカの主流派国際政治学に対してきわめて強い反論になる。

※研究経過と結果の概要（以下の欄に 35 行以内(1500 字程度)にまとめる）

申請者は、国際関係論におけるリアリズム（現実主義）とリベラリズム（自由主義）という異なる理論に基づく世界観の枠組が、論争の的になっている日本の捕鯨政策と北朝鮮に対する経済制裁という 2 種類の国際関係設定に関して、国民の認識をどのように変えるかを明らかにするために、北米に留学中の 2 名の若手日本人研究者（ワシントン大学・菊池氏、テキサス大学・増村氏）とチームを組み、日本国内で独自の調査実験（いわゆるオンラインサーベイ実験）を行った。その結果、現実主義的な枠組みは、一方的な政策に対する一般的な支持を促進する効果があることがわかった。このことは、日本の場合、リアリズム・フレーミングが、敵国への攻撃能力や核兵器保有能力のような他の単独行動主義的な政策に対する人々の支持に影響を与える可能性があることを示唆している。本研究はすでに国際学術誌への投稿段階にある。

より一般的には、本研究は、現実主義的な枠組が自由主義的な枠組よりも強力であることを示唆しているのかもしれない。ただし、この結果は日本だけのものなのか、それとも他の国でも一般化できるものなのかは、保守的に考えなければならない。冒頭で述べたように、日本は典型的なイズム教育の国であり、日本の知見は他の国にも共通すると考えられるが、そうではないだろう。この点については、さらなる国際比較実験が重要であり、それが私たちの次の課題であろうと信じている。

また、本研究で得られた知見は、イズム教育に関して重要な示唆を残している。現実主義の枠組みは回答者に強い影響を与え、自由主義の枠組みはほとんど影響を与えないことが観察された。私たちの実験デザインでは、2つのフレームワークの効果を別々に検証したが、この結果は、特定のイズム教育が国際関係論を学ぶ学生に対してアンバランスな影響を与える可能性を示唆している。というのも、リアリズムの影響は強く残り、リベラリズムの影響は相対的に弱いことが示されたからである。仮に、2つのイズムを等しく理解させたいのであれば、リベラリズムの概念や枠組みについてより多くの時間を割くか、詳細な説明をした方がよいのかもしれない。この点はまだ仮説段階であり、今後さらに研究が必要である。

我々の発見は、外交政策態度への行動的アプローチに関する文献（例：Kertzer et al. 2014; Rathbun et al. 2017）につながる。個人の属性や価値観が外交政策に対する態度を構成することを示唆する先行研究とともに、我々は特定の世界観が人の意見を揺さぶることを見出した。しかし、内在的な性格特性とイズムの効果との関係は依然として不明瞭である。今後の研究では、個人属性とイズムのフレーミングの条件付効果について検討する必要がある。

国際政治学において、リアリズムにせよリベラリズムにせよ、イズムの影響はきわめて強いと考えられてきた。モーゲンソー以来の伝統であったが、その科学的評価は限られ、日本という平均的なイベント・フィールドで知見を得た本研究の貢献は、きわめて大きいと評価できる。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

Masanori Kikuchi (Washington University in St. Louis), Yuji Masumura (University of Texas, Austin) and Atsushi Tago (Waseda University and PRIO) “A Tale of Experiment on Two-isms of International Relations: A Study in Japan” *Working Paper*. Waseda University.

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご注意ください。